最後の作品「如己堂」
～二つの永井隆記念館④～

新約聖書のマタイ、マルコ、ルカの三つの福音書に、イエスに対して律法学者が「最も重要な掟（おきて）は何ですか」と尋ねるシーンがある。

イエスは「心を尽くしてあなたの神である主を愛すること、そして隣人を自分のように愛すること」と答える。

己の如く人を愛すること「如己愛人」、永井隆博士が最も大切にした言葉である。

白血病で「余命三年」と診断され、寝たきりになった永井博士のために浦上教会の仲間が建てた二坪もない小さな建物、彼はそれを「如己堂」と名付けて住んだ。

永井博士自筆の「如己愛人」の書

緑夫人を原爆で失い、誠一（まこと）、茅乃（かやの）の幼い子供が残された。その子供への遺書ともいえる作品「いとし子よ」の中で「わが子よ、如己堂に住む者よ。どうか家の名にふさわしい愛の一生を送っておくれ！これこそ私のそなたたちに残すことばのすべてである」と書いてある。

さらに如己堂について作品「平和塔」の中で「如己堂…己の如く他人を愛す、という意味を名にとったこの家は、家も妻も財産も職業も健康も失って、ただ考える脳、見る目、書く手だけを持つ廃人の私を、わが身のように愛してくださる友人が寄って建ててくださった。その数々の友の如己愛は絶えずこの家に注がれ、それによって廃人の私は生命を確かにつないできた。寝たきりの私と幼い二人の子とが、ひっそり暮らすにふさわしい小屋である」と書いている。

如己堂は永井博士の「如己愛人」の実践の場であった。日本キリシタン史の第一人者、片岡弥吉が書いた「永井隆の生涯」を読む。この二つにまさる掟はほかにないとイエスが言った「あなたの神である主を愛することと隣人を自分のように愛すること」、永井博士はまさにこの掟通りに生き抜いたことがわかる。

今回一緒に如己堂を訪ねたクラークスン神父とは以前、マリッジ・エンカウンター（結婚との出会い…夫婦がより深い一致を目指す運動）をチームを組んで取り組んだが、最近、離婚は増える一方だ。さらに隣人を愛するどころか、自ら命を断つ人が年間三万人を超える世の中となった。

イエスが生きたイスラエルの民の時代や永井博士が生きた戦後より、今の世の中は、はるかに物質的に豊かで個人の人権も尊重されているのに、人の心の荒廃が目立つのはなぜだろうか。

如己堂前でクラークスン神父と妻

クラークスン神父のように、自分の生涯を神への奉仕にささげる司祭になる人も大幅に減少している。如己愛人ならぬ利己主義。何が私たち現代に生きる者の心を変えたのだろうか。

今、クラークスン神父と長崎二十六聖人修道院に住むメキシコ人のアギラール神父も永井博士を尊敬し、長崎に永井学生センターを開設した。日本の若者のために四十四年間、館長として働かれたが、残念ながら今年三月に閉館された。

今こそもっと永井隆の生き方が見直される必要があるような気がする。私の心の中に如己堂を建てねばと思うのである。

（元山口放送取締役ラジオ局長）